

「ことば」の復興

壊れた社会をつなぎ直す

作家 高橋 源一郎



たかはし・げんいちろう
1951年生まれ。明治学院大学
教授。2011年4月から「論壇時
評」を担当。「時評を書くため
に集めた本が1800冊くらいにな
っています」 =早坂元興撮影

①ミュージカル「タイムライン」
(作・演出=藤田貴大、
3月26日に福島市で上演/福
島県いわき市でも4月3日に
公演予定。チケットはホーム
ページから、http://www.f
ukushima-performingart
s.jp/)



②東北学院大学・震災の記録プ
ロジェクト 金菱清(ゼミナ
ール)編『呼び覚まされる
霊性の震災学』(今年1月
刊)

③映画「FAKE」(監督=森
達也、6月4日から渋谷ユ
ロススペースで公開)



④論壇時評は毎月の最終
木曜に掲載します。「あ
すを探る」は6人の論壇委員が
交代で書きます。赤石さん以外
の委員は、井手英策さん、小黒
英二さん、木村幹さん、津田大
介さん、中北浩爾さんです。今
月で小黒さんと木村さんは委員
を退任し、4月から国際政治に
詳しい遠藤乾さん(北海道大学
教授)と憲法学者の木村草太さ
ん(首都大学東京准教授)が加
わります。小阪淳さんのCGは
新年度も続きます。

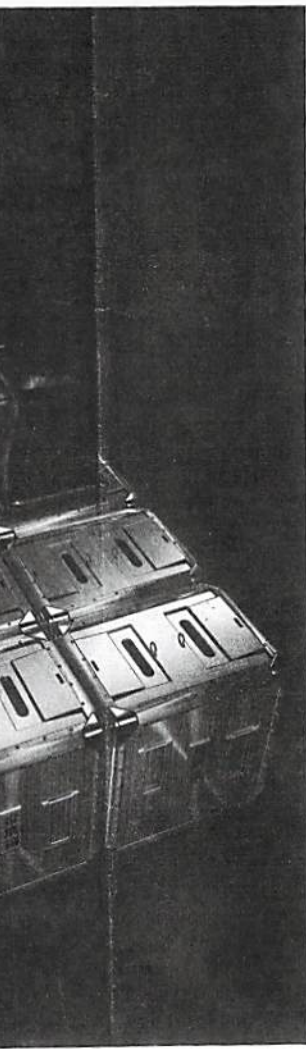
舞台の上に、むすうの白い線がひかれ
ている。それは、福島をかたち作って
いる海岸、道路、線路、河を示したもの。
そしてふるさとのまち。その上には、子
もたちが眠っている。音楽が流れ出し、
あさが来る。子どもたちが起き上がり、
しゃべりはじめる。

「いつだかあさ……やっぱりあの日
も……あさはおとすれた……」
なんともない日々わたしたちのタイ
ムライン……なんともない日々はわたし
たちと歩いてゆく」

福島の依頼で、劇作家の藤田貴大ら
が集まって、音楽劇「タイムライン」が
創られた①。出演しているのは福島の
中学・高校生。テーマは「あの日」。
「あの日」とは何だろう。5年前の、
あの震災の日だろうか。そうかもしれない。
そうだとすると、あの時刻までは、
穏やかに日常は流れていた。

藤田は、出演する子どもたちから、彼
らの生きる日常の「こま」こまを聞き取
り、舞台の上に再現した。「地震」も
「原発」も「津波」も出てこないの、
「あの日」が奪っていったものの重さ、
大きさが浮かびあがる。けれども、同時
に、それまで気がつかなかった日常のい
とおしさも、抱きしめるように優しく描
かれる。ほんとうに、ほんとうに素直ら

しかった。
「呼び覚まされる 霊性の震災学」
は、東北学院大学・金菱清(ゼミナ
ール)による「震災の記録プロジェクト」②。
学生たちは、被災地を歩き、マスコミに
はあまりのらない、人びとの真実な声に
耳をかたむけた。
ある学生は、石巻のタクシードライバ
ーたちが頻りに体験している幽霊現象な
らについて調査した。そんなものが科学的な
調査の対象になるのか。学生たちは先入
観をもち、聞きとらうとする。「幽
霊」たちはタクシーに乗り、ドライバー
たちと話をした。もし、それが白昼夢な
ら、残された乗車記録は何なのか。そし
て、ドライバーたちの内心にあるもの



「死」を受け入れていった。そこには、
わたしたちの社会が忘れかけていたもの
があった。彼らは、単に「死者を忘れた
いこと」ではなく、やがて「死者と共に
生きること」を目指すようになった。死
を常に意識することで、はかない生の価
値を深く噛みしめるために。そこには、
よりよい社会を作り出すための重要なヒ
ントがあるのだ、と。

わたくしが担当する論壇時評は、震災直
後、5年前の4月から始まった。1回目
の最後に、わたしは、こう書いた。
「壊滅した町並みだけでなく、人び
とを繋ぐ「ことば」もまた『復興』され
なければならぬ」

CG・小阪淳
現代文明をイメージした作品を毎月掲載します。

オウム真理教を描いたドキュメン
タリー映画で知られる森達也監督の新作
「FAKE」は、「金菱の作曲家」とし
て世間を騒がせた佐村河内守を追いかけ
た③。彼は、ほんとうに聴こえなかつ
たのか。ほんとうに、自分では作曲し
なかったのか。だが、映し出されている
のが、この事件の「真実」は何かという
問いではなく、ほんとうにこの世界に

「真実」などあるのかという問いである
ことに気づいたとき、観客は、迷宮の中
に入りこむ思いに囚われる。映画が映し
出そうとしたのは、社会を騒がせた一つ
の事件ではなく、この社会の構造そのも
のようには思えた。
どんなに真実を探しても、たどり
着くことなどできないのかもしれない。
いや、そもそも、真実などなく、わたし
たちはみんな「FAKE」(にせもの)
に踊らされているのかも知れない。
「真実」にもとづき「にせもの」を激
しく糾弾する、それが正義だ。だが、ど
こにも正義などないのなら、どんな権利
があっても、誰かを、何かを否定し、攻撃
できるのか。ついに「にせもの」であり
つつも、それでもっと手を差し出す
ようにして映画は終わっている。
わたしが担当する論壇時評は、震災直
後、5年前の4月から始まった。1回目
の最後に、わたしは、こう書いた。

◆次回からの「論壇時評」は歴史社会
学者の小黒英二さんが担当します。